高尾森林センターでは、毎年、都市圏の市民の皆さんを対象に、広く一般公募で募集する森林カレッジを開講しています。その目的は、年５回の講座と作業体験を通して、森林林業への正しい理解を持った、森林ボランティアのリーダーの育成にあります。

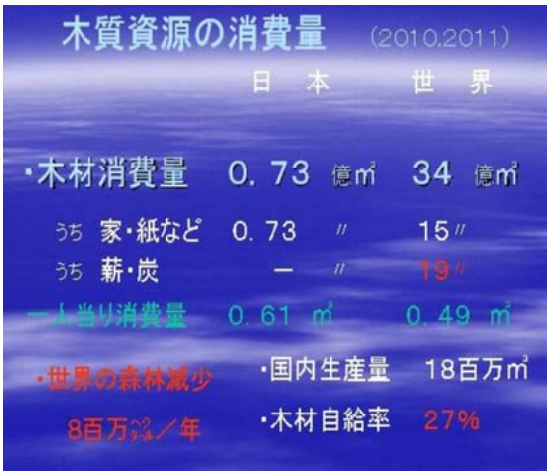
今回は、森林カレッジⅣの講座で、当センター所長が行った、「国内外の森林・林業事情」と題する座学の内容を紹介します。

一　世界と日本の森林事情紹介

「世界的視野で考え、地域的に行動する」の地球サミットのスローガンをはじめに、世界の森林は、地球表面の３割に満たない陸地の、そのまた３割に過ぎないこと。しかし、経済的に貧しい発展途上国では、鉱物資源と同様に、森林資源も外貨稼ぎに手軽なため、日本をはじめとした先進国にその資源が流れること。世界では未だに薪や炭の森林利用が６割を占め、換金作物への農地転用や焼き畑等と相まって、毎年、北海道と同じ面積の８百万㌶もが失われ、生物多様性や温暖化に悪影響を及ぼしている、と具体的な統計数値を使って紹介しました。

また、我が国は世界有数の森林率（７割）を誇り、うち４割が戦後営々と育成したスギ・ヒノキなどの人工林であること。豊かな人工林はそろそろ収穫期に入るが、木材価格の低迷で外国産木材への依存度が依然大きく、世界中から木材を輸入している実態にあること。その結果、国内自給率は、近年は上向きつつも２割台で低迷していること。

その打開策として、健全な森林の整備と山村の活性化策を図ることとして、国産材の需給力を高め、10年後は自給率50㌫を目標にして森林林業の再生に向けた取組みを進めていること。そのために、川上では施業の集団化、人材の育成、作業路網の整備と高性能機械による低コスト林業を先導していること。川下の需要喚起策の一つには「公共建築物等木造利用促進法」が制度化され、小学校等低層の公共建築物の木造化を進めていることなどを紹介しました。



二　森と水と土のつながりを大切にする稲作文化の紹介

講師のアジア駐在の経験を踏まえ、森林と水と耕作が連動したアジア固有の稲作文化の特質利点が紹介されました。まず、熱帯地方で見られる焼き畑や火入れ牧野の慣習は、過度に繰り返えされると森に蓄えた腐植層を焼失させ地味の劣る砂礫土に変えること。さらに、熱帯特有のスコールがなけなしの肥沃土をも流しさり、森林再生も難しい熱帯の砂漠化を招いていると指摘しました。

一方、住民が森の働きをよく理解し、巧みに耕作と森と水を結びつけている稲作文化ではこれらの悪循環が起こらないことを指摘しました。

平地は当然のこととして、山腹斜面に築かれた我が国や東アジア諸国に見られる棚田・棚畑の土地利用法の利点を紹介しました。

急斜面の山腹でさえ、数千年に及ぶ先祖からの営みが引き継がれ、広大な棚田が築かれていること。奥山には不文律の不伐の森を残し、水源の確保と協働による用水路の手入、「結い」による共同作業など、豊作の喜びを分かち合い、互いに助け合う、森と水と土の絆を基調とした村落共同体が形成され稲作文化が受け継がれていると紹介しました。

森からの栄養豊かな水を引き入れ、肥料としての有機物（草、水草、枝葉）を補給しながら、西洋的畑作の連作障害も起きない、永久的な稲作が世界人口の過半を扶養していると締めくくりました。